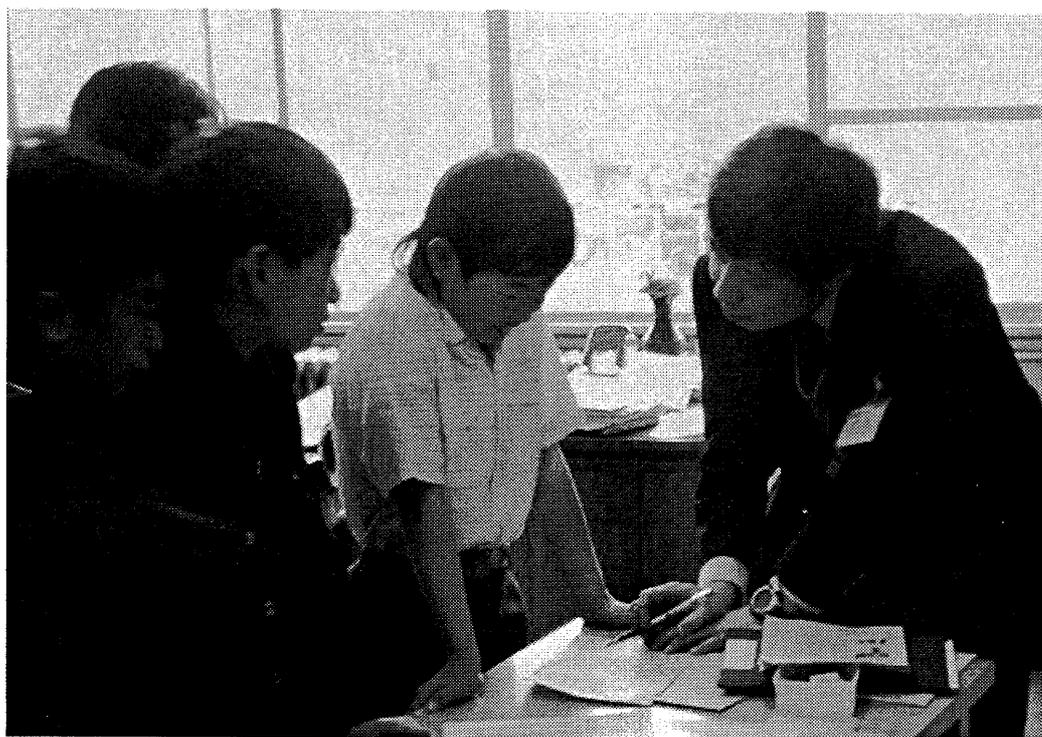


小中連携学習開発部会 教科構想および実践報告



国語科 実践事例

1. 実践1

(1) 単元・授業の構想

① 単元名 メディアをつくろう

「ニュースを伝え合おう」(小学校5年)

② 単元について

ニュース番組は事実を正しく客観的に認識する取材の上に成り立ち、厳選された情報を効果的に発信するメディアである。本単元でニュース番組を題材として扱うことにより、事実を見つめ取材する力を養い、収集した情報を厳選して原稿を作成することを通してニュース番組の構成を理解し、相手を意識した効果的な伝達方法について学ぶことができる。また、5年生の半ばを過ぎようとする今、これまでに身につけてきた力を総合的に発揮しながら、学習を進めることができる教材でもある。子どもたちには、番組を構成していく体験を通じて相手を意識した伝達方法を学ばせていきたいと考えた。

指導にあたっては、実際にニュース番組を分析することを通して番組構成をつかみ、その伝達手段としての特徴や工夫を学ぶことができるようにする。また、子どもたち自身が取材活動を行い、身近なテーマを扱いながら番組作りを行っていく中で、情報の担い手と受け取り手の意識についても取り上げる。原稿について取り上げる際、実際のニュース番組と自分たちの作成した原稿をくらべることを通して、番組制作の工夫について考えさせ、お互いに意見を述べ合い、効果的に思いを相手に伝える方法について考えていくことができるようにしたい。

③ 単元の目標

- ニュース番組をつくることを通して、ニュースに興味を持ち、メディアの担い手としての自覚を持つことができるようにする。
- 自分の意見をはっきりさせながら、ニュース番組作りについて話し合うことができるようにする。
- 伝えたいことを意識しながら、工夫して原稿を書くことができるようにする。
- ニュースの内容を的確に押さえながら、伝えたいことをとらえることができるようにする。

④ 単元の計画(全10時間)

第1次 ニュースについて知ろう……2時間

第2次 ニュース番組をつくろう……7時間

- ・ 題材と構成を決めよう
- ・ 原稿をつくろう
- ・ 番組を仕上げよう

第3次 ニュースを伝え合おう……1時間

(2) 実際の授業の様子

〈第1次〉ニュースについて知ろう

実際の学習に入る前に、テレビ番組についてのアンケートを行い、ニュース番組に対するイメージについても調査した。

- ・ 占いなどいろいろなコーナーがあっておもしろい。
- ・ 新しいことがわかるので好き。
- ・ 同じことを何度も言っているからきらい。
- ・ むずかしい言葉がいっぱい出てくるので、(ニュースは)きらい。
- ・ ニュース番組は、テレビ画面にごちゃごちゃ字が出てきてわかりづらい。

また、単元の導入では、ニュース番組についてのイメージを持ちやすくするために、子どもたちにとってわかりやすい題材を扱った実際のニュース番組の一部をみせた。

P：その場所の映像があるのでよく分かる。

P：アナウンサーの話し方がおもしろい。

P：画面に出てくる文字がくふうしてある。

P：言葉がむずかしいと思っていたら、きちんと説明があった。

映像メディアの持つ力はやはり大きい。子どもたちは、実際の映像を熱心に見ていた。そして、ニュース番組も伝え方次第で、おもしろく、分かりやすいものになるという確信を得たようであった。

〈第2次〉ニュース番組をつくろう

子どもたちが実際にニュースを伝えるにあたって、持ちよった題材について交流し、自分たちのつくりたいニュース番組の構成について話し合った。子どもたちが持ちよったものには、実際のニュースや新聞などで報じられているような題材もあったが、学校や地域・家庭の話題も多くみられた。

題材の決定に関わって、教師はそのニュースを聞いたり見たりした人がどんな感じを受けるかということについてアドバイスをしている。事実をゆがめて報道することはまちがっているという認識は子どもたちにもあったが、伝えようと意図していること以外の情報も伝わる可能性があるということも全体で考える機会を持った。

話し合いの中で、映像や写真・具体物などを入手し、実際に番組の中で扱えそうな題材を選んでいったようである。これは、見る側にとっても重要なことであり、より視聴者に訴えかけるためには、現実味のある、より具体的な材料が必要であると感じたようであった。

P：長生きのクワガタの話題にします。ぼくのクワガタなんだけど…。

P：ヌートリアのことをしたいけれど、噂だけで実際に見た人がいないんだよ。

P：スポーツランキングに決めました。

P：おもしろい話題にしたいんだけど…。

P：迷いバトの話だったら〇〇さんが見つけたからインタビューできるよね。でも、写真がないよ。

題材を決め、番組構成について話し合いを持つにあたり、それまでは、番組制作に対してあまり意欲的ではなかった子どもたちも実際の活動に見通しが持てるようになると、積極的に意見を出し始めていた。

P：インタビューを入れた方がいいよね。

P：バックに音楽があるといいと思う。

P：今度の時間のビデオを撮っておきたいね。

P：写真を撮っておきたいね。

キャスター・アナウンサー・レポーター・インタビュアー・カメラマンといった言葉を紹介していくと子どもたちは、各自の役割を決め、協力して活動を進めていった。

展開を話し合った後、原稿作成に取りかかった。自分たちのニュース番組の中で実際に使おうとする題材がそろっていくにつれて、より明確に番組の流れが意識できるようになってきた。そこで、教科書の原稿例等も参考にしながら原稿作成に取り組んだ。

<子どもたちのふりかえりから>

- ・ ○○さんのとった写真が良かった。番組の中でうまく使いたい。
- ・ インタビューがうまくできたと思う。
- ・ 何とか原稿が完成しました。練習をして、はっきり伝えられるようにしたいです。
- ・ カメラがぶれてしまうので、さつえいのときには気をつけたいです。

原稿が完成すると各グループごとにその作成した原稿をもとに練習に取り組み、その様子をビデオに撮影した。実際のニュース番組を見比べながら、自分たちの番組をふりかえる材料にした。この後、修正した原稿をもとにリハーサルを行い、本番撮影を行った。

P：解説はキャラクターがします。ピタくんです。(言いながらキャラクターを見せる。)

P：インタビュアーがスタジオに登場して、感想を言うようにしました。

P：ハトの写真もないし、紙芝居にしました。音楽も入れてドラマ風にしています。

当初は原稿も事実を伝達するのみであったが、ここに来て、場面転換などによる視聴者の注目の仕方なども意識するようになってきた。

<第3次> ニュースを伝え合おう

単元の最後に、今までの学習でできあがった原稿をもとにニュース番組を伝え合い、学習の深まりを確認した。

<子どもたちの感想から>

- ・ ニュース番組にはたくさんの工夫があることがわかった。
- ・ カメラのぶれやズームが難しかった。
- ・ ニュースキャスターは、意見をしっかり言っているし気をつけていることがたくさんある。
- ・ たくさんの人の協力が必要なのだということがよくわかった。
- ・ インタビューや現地の取材の様子などを入れるとおもしろいしよくわかる。
- ・ 話す速さや調子に気をつけないといけないことがわかったし、ときには冗談なども入れながら話すを見ていてあきない。

(3) 授業をふり返って

学習を通して、子どもたちの表現に対する意識が高まったように思う。そして、お互いを尊重し合い、ひとつの活動を通してともに学び合う姿が見られた。同じ事実を伝える場合でも、表現の仕方によって、情報を受け取る側の印象は変わってくることに気がついた。

また、学習の中で改めて気がついたことだが、伝えようとしている内容以外の情報も、受信する側は受け取ることを意識し、受信する側の受ける印象を考えながら情報を発信していかなければならないことも学ぶことができた。

本単元では実際に映像メディアを扱い、取材活動を通して題材を選び、原稿を作成するという活動を経ている。この活動の中で、子どもたちは、自分たちが伝えたい内容を表現することに対し意欲的に取り組むことができた。しかしながら、ニュースを伝えるという「話す」活動と番組中で実際に提示する文字情報・図や写真といったものの組み合わせ方を考え番組制作に取り組む際に、イメージや見通しを持ちながら活動を進めていくことは難しかったようである。また、技術面での負担も大きく、結果的には機器を扱う技能が向上したものの、視覚的な情報に意識が向き、言葉による表現を十二分に吟味できたかどうか不安要素が残る。モデルとなるものをいくつか用意しておき、自分たちの考えと近いものを参考にできるようにすることや、環境のさらなる整備が必要であろう。

2. 実践2

(1) 単元の構想

本単元は年間学習計画2学年第7単元「私の国語学習」として設定したものである。この単元は、これまでの国語科学習での経験を受け、自分の興味・関心や課題意識を生かして主体的に学習に取り組むことができること、自分の考えを論理的に表現し広く他の意見や情報から学んで自分のものの見方や考え方を深めることができること、さらには、既習事項や創意工夫を生かして学習に取り組み、国語の力をいっそう確かなものにしたり、主体的学習の楽しさを実感したりすることができることを狙いとして設定している。

今回は、主目標を「話す・聞く」に設定し公開討論番組づくりに取り組んだが、さまざまなメディアから情報を収集させ、「生きること」の意味について感じたり、考えたりしたことをまとめる中で、「読むこと」「書くこと」の活動もずいぶん取り入れたものとなった。

また、単に討論の技術や、番組制作のスキルを身につけさせるだけではなく、学習を通じて、自己の視野を広げ、生徒がこれからの人生を肯定的に生きることができるよう、前向きな人生観を持たせるようしたいと考えた。

① 単元名：様々な情報を活用しよう 公開討論番組

「生きるとは？—人生に希望はあるのか—」

② 単元について

『想う』（五木寛之 東京書籍）で筆者は「人間誕生についての3つの真理」を述べている。これを受け、「生きること」をテーマに、さまざまなメディアから情報を収集し、それらをもとに、自分自身の人生の意味について感じたり、考えたりしたことを討論番組としてまとめ、表現することで、自らの視野を広げさせ前向きな人生観を持たせたい。「生きることの意味」について考え、友達と意見を交換することは、この時期の生徒にとって大変重要であると考えた。

③ 目標

- 自分の生涯をイメージし、自己を肯定的にとらえさせ、前向きな人生観を持たせることができるようにする。
- さまざまなジャンルから「人生」「生と死」をテーマに情報を収集させ、それらをもと

に自分自身が「生きること」の意味について感じたり、考えたりしたことを発表することができるようにする。

○ 番組を演じさせたり、他者の発表を見させたりすることで、「生きること」について考え、自分の視野を広げることができるようにする。

(2) 指導計画

本単元は、次の二つの学習内容を同時進行で行った。

- ① 「一人生に希望はあるのか」というテーマで、自分の考えをまとめる。
- ② 討論番組を作る。

(3) 実際の授業の様子

① 脚本作り

授業の実施に当たっては脚本作りが大きなポイントとなった。

- 1 制作会議 大まかな流れの決定
ディレクター・脚本係・教師
- 2 構成台本作成 ディレクター・脚本係・教師
- 3 せりふ案作成 脚本係・(教師)
- 4 せりふ作成 全員
- 5 脚本作成 脚本係・(教師)
- 6 せりふ校正1 全員
- 7 せりふ校正2 脚本係
- 8 せりふ読み合わせ 全員
- 9 脚本完成 脚本係・(教師)

上の1～9にあるように脚本の構成と調整は脚本係・ディレクターが行い、せりふ作りはチーム全体が関わるようにした。

せりふ作成の一例を挙げる

① 生徒配布用紙

— 討論者 —

A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後 92 時間ぶりに救出された皆川 優太ちゃんです。

事実 ()

意見 ()

② せりふ作成

— 討論者 —

A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後 92 時間ぶりに救出

された皆川 優太ちゃんです。

事実 優太ちゃんは 92 時間も車に閉じ込められていました。だけど車と岩とのほんのわずかな 隙間に入っていて奇跡的に救出されました。

意見 そのことについて、車と岩とのわずかな隙間で奇跡的に助かってすごいと思いました。奇跡とはこのことだと思います。

③ せりふ校正 1

討論者 A

意見 いいえ、そんな中でも、希望の光はあります。地震発生後 92 時間ぶりに救出された皆川 優太ちゃんです。

事実 優太ちゃんは 92 時間も車に閉じ込められていました。だけど車と岩とのほんのわずかな 隙間に入っていて奇跡的に救出されました。

意見 地震で被害を受けられた方にとっても、そうでない方にとっても、優太ちゃんのあの姿は、希望の象徴だったと思います。幸い優太ちゃんは救出後順調に回復し、つい先日病院を退院することができました。

この後、せりふは脚本係によって、全体の中での調整が行われ、さらには、このせりふを担当する討論者自身によって、話しやすいように微調整がされた。

(4) 授業を振り返って

① 意中のキャストिंगで意欲化を図る

番組作りは何よりもチームワークが必要となる。それぞれが自分の役割りを自覚し、積極的に活動したチームは、番組制作をスムーズに進めることができた。

自分は脚本や討論をする立場ではなかったけど前日の準備などで自分の仕事を全うすることができました。私達会場・記録係はあまり仕事がなくやりがいもないと思っていたんだけどそれをしてから自分のしたことが自慢できるようになりました。……略……実際に本番で演じている人たちと一体となって、収録を楽しんですばらしいものにするという気持ちが持てるようになりました。

キャストिंगの際は、アンケート調査での生徒の希望を重視し、なるべく第 1 希望もしくは第 2 希望希望の中で進めて行くことがその後の授業を活性化させるポイントとなった。

② 脚本作りで論理的思考力を養う

脚本作りにあたって中心となるのは無論脚本係であるが、その元となる意見は、資料(新聞・本・ニュース映像・聞き取り調査)を元に全員が賛成・反対両方の立場で自分の考えを文章し、出し合った。その際、出された意見を、賛成・反対、多数・少数、一般・特殊といった具合に分類する中で、生徒は他者との対話・自分自身との対話を重ね、自分自身の考えを深化させ、人生について色々な側面から考えることができるようになった。

できるだけみんなの意見を取り入れることに特に専念してみると僕自身様々な知識をたくさんもらい脚本を作ることができました。頭の中でミニ討論会を行うと楽しくでき

ました。所々に僕の意見を入れ、この番組はどういう考えかみんなに考えてもらいたかった。

その結果、テーマとしては今までにないほど重いものであったにもかかわらず最後まで投げ出すことなく意欲的に課題に取り組むことができた。

③ 見せる討論

番組出演者の中には、役になりきって、せりふを話すのか、それとも自分の意見を言うのか、戸惑う者もいた。実際授業の最初では、ただ、紙に書いてあることを読むだけという生徒が多かった。そのジレンマからか、台本無しで自由に討論すればいいではないかという感想を口にするものもいた。しかし、役作りが進み、せりふが自分の中に落ちていくと同時にその戸惑いもなくなっていったようである。

この学習をやってみて普段テレビで見ている討論番組の裏にいろんな工夫があることがわかりました。見るだけだったらいろんな改善点が見つかるけど、いざ自分でやってみるととても難しくどこをどう直したらいいかも分からなくて分からなくて悩んだりしました……(略)……本番では、一人ひとりその役に合った形で台本の言い方を変えるなど工夫できてよかったです。

社会科 実践事例

実践例1 小学校社会科

○学 年 第4学年 第7学級 39名

○日 時 平成16年11月11日（木）第2校時

○単元名 「小さな国際港 糸崎物語 一字都宮龍山，小林徳三郎の糸崎港へかけた思い
ー」

○単元について

周りを海に囲まれた日本は，昔から海を通じて人や物，知識，文化の交流が盛んに行われたきた。特に瀬戸内海は古より重要な海上交通路であり，沿岸の地域は海上交通の興隆とともに発展してきた。それは，経済的な発展のみならず，学術や文化の発展にも寄与してきた。本単元では，糸崎港における外国との貿易や交流が，三原近郊の発展に大きな影響を与えたことを理解するとともに，外国との貿易や交流の重要性を見抜いた先人の先見性や情熱，努力を知り，自分たちの今の生活が先人の多くの働きにより成り立っていることを理解することが主なねらいである。

事前調査によると，子どもたちは港は人が船に乗り降りする所というところだけで，人や物品，知識，文化の交流の場であることを理解していなかった。

指導にあたっては，子どもたちが100年以上も前のことに興味，関心をもって学習に取り組めるように，子どもたちにとって身近な事象をもとに単元の導入をはかる。また，ゲストティーチャーから話を聞いたり，昔と現在の糸崎港や三原の様子の違いがわかるように写真や図などを数多く提示し，学習内容が具体的にとらえられるようにした。

○ 単元の目標

- ・ 糸崎港が，三原の発展に果たしてきた役割に興味，関心をもち，糸崎港開港，整備に努力した人々の思いについて進んで調べようとする。
- ・ 宇都宮龍山を始め多く先人の働きにより，三原がどのように発展してきたのかを具体的に考えることができる。
- ・ 糸崎港などの見学やゲストティーチャーからの話，様々な資料を調べることを通して，糸崎港の歴史や状況について，図や写真，表，グラフなどを用いてわかりやすく表現することができる。
- ・ 糸崎港が三原の発展のために重要な役割を果たしてきたことを知り，宇都宮龍山を始め糸崎港の開港，整備に携わった先人の情熱や苦心を理解することができる。
- ・ 他国に目を向け，他国との交流の重要性に気づいていた宇都宮龍山や小林徳三郎の先見性を理解することができる。

○ 単元の計画（全10時間）

第1次 宇都宮龍山について知ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・3時間

第2次 糸崎港近辺を見学し，詳しく調べよう・・・・・・・・・・6時間

第3次 糸崎港と三原の歴史について調べよう・・・・・・・・・・3時間

第4次 糸崎港開港と拡張の工事の様子について調べよう・・・2時間

○ 授業の実際

本単元では，見学やゲストティーチャーの話や様々な資料をもとに糸崎港（松浜港）が三原のまちの発展に多大な影響を与えてきたことを理解し，海（港）を通じた他国との交

流による地域の発展をはかった先人の情熱や先見性のすばらしさを感じ取ることが主なねらいであった。

子どもたちは、本学園の校歌の歌詞にもあり、学園の敷地内にある「景雲台」の命名者である宇都宮龍山を通して、宇都宮龍山が築港を進言した松浜港（現在の糸崎港）について興味、関心をもって調べ活動を行った。

身近にありながらほとんど子どもたちが知らなかった糸崎港近辺をゲストティーチャーと共に見学し、糸崎港に他国の船舶が入港している様子を見たりした。

子どもたちは、昔と今の三原市の航空写真や年表、市の人口増減表、工場進出表など様々な資料を読み取り活用しながら糸崎港開港により三原のまちがどのようにかわっていったのか考えていた。

小林徳三郎の子孫の方から手紙や資料をいただき、子どもたちはより詳しく宇都宮龍山や小林徳三郎について調べまとめた。

○ 成果と課題

（成果）

子どもたちは昔と今の三原市の航空写真や年表、市の人口増減表、工場進出表などの資料を読み取り活用しながら事実をしっかりと捉え、糸崎港と三原市の発展の関係を考えることができた。また、実際に糸崎港の見学した時、他国の船舶が入港している様子を見たり、アメリカで起こった同時多発テロにより他国の船舶が入港している時は岸壁のゲートが閉まり中に入れないことを知ることにより、自分たちの身近なところで他国とつながっていることを理解することが出来た。

子どもたちは、ゲストティーチャーと一緒に見学をしたり、小林徳三郎のお孫さんからの手紙をいただいたことにより、自分たちが生活している「三原」の歴史や伝統を知ることが出来た。またそれだけにとどまらず、「三原」の歴史や伝統をつくってきた先人の功績や思いを感じ取ることが出来た。また、先人の功績や思いを受け継ぎ、語り継いでいる方々の苦勞や努力に感動し、次は自分たちが受け継ぎ、次に語り継いでいくことの大切さも感じ取ることが出来た。

（課題）

昔の事象や、今と昔の違いを理解しやすいように写真や年表、様々なグラフや表を多数用意したが、小学校4年生の子どもたちにとってどのような資料がより効果的なのか今後検討していく。

また、他国とのつながりを意識させ、より子どもたちの国際的な視野を育てるための教材、教具の開発を行っていく必要がある。

実践例2 中学校社会科

1 概要

国際的な資質を育成する社会科学習を進めるにあたって、カリキュラム開発を進めています。本学園は、幼・小・中一貫教育を進めているので、系統だったカリキュラムになることを念頭におかなければなりません。その際、育成すべき力として、以下のように考えています。

小学校3・4年生では「事実をしっかりと捉える児童」の育成 → 「観察力」

小学校5・6年生、中学校1・2年生では「多面的・多角的に社会的事象を捉える児童・生徒」の育成 → 「批判力」「推理力」

中学校3年生では「自主的・理論的に判断し行動することのできる生徒」 → 「社会的判断力」

中学校3年生、本学園の最終学年として、「観察力」「批判力」「推理力」を身に付け、それらの力を集大成し、関連づけながら「社会的判断力」をつけていくことのできる、国際的な資質を育成するカリキュラムや単元開発が本年の課題となっています。

(実践例)

1 単元名 「世界平和に向けての第一歩」

2 対象 3学年

3 単元設定の理由

本単元では、地理的分野・歴史的分野などの既習内容をふまえた上で、現在おこっている様々な国際状況を、平和というキーワードから追究していきます。

国際社会は常に流動的であり、そのような中、日本も国際連合を中心に世界平和に向けての取り組みを行っています。ただし加盟国が多いので、各国の駆け引きや考え方の違いなど組織自体が上手く機能していない面も見られます。中学生の日常の生活場面、例えば委員会活動や学級活動などでもスケールの違いはあれ、駆け引きや考え方の違いによる対立・調整・和解など共通する場面があります。よって、戦後、世界平和を達成すべく結成された国際連合を通して、日本の国際貢献などを考えることは、生徒にとって理解しやすく、また、考える過程は、組織運営力や調整力などこれから将来に向けての生活場面、さらには国際社会の場においても十分役立つと考えられます。本単元は、国際状況をふまえながら、日本の国際貢献の理解並びにその延長線上にある、国連安保理常任理事国入りの是非を考えることで、社会的判断力を育成し、公民的資質の中でも「国際的な資質」を形成していくのに適した教材であると考えます。

本学級の生徒は、今までの学習評価や日常の学習場面における会話・発言から、国際社会のできごとについて興味・関心はあるが、知識・理解の範囲にとどまっており、学習した知識をつなげて関連づけて思考・判断できる所までには至っていません。

指導にあたっては、新聞記事やビデオなど資料を活用し、生徒が事実を知り課題にそって推理力や批判力を使って自分の力で考え、自主的・理論的に判断する、といった思考の流れを意識しながら学習する習慣を身につけさせたいと考えます。学習する際、自分と他者の意見を交流させ合意を形成させたり、国際社会の変化を予想したり、国際貢献を評価するなどして、日本のあるべき姿について意見を持たせ、それを表現することで、社会

生活をおくる上での実践力や創造力をつけることができると考えます。

4 単元の目標

- (1) 国際社会における日本の役割について興味・関心を持ち、意欲的に追究することができるようにする。
- (2) 国際社会におけるわが国の役割について、国際平和や国際協力、政治的観点などの事例から、多面的・多角的に考察することができるようにする。
- (3) 新聞記事やビデオを利用して、国際社会の現状について調べることができるようにする。
- (4) 日本の国際貢献を理解できるようにする。
- (5) 日本の安保理常任理事国入りの是非について、調べて考えたことをまとめて、交流することで思考の再構成をし、発表する力をつけるようにする。

5 本時の指導

(1) 目標

前時までの学習をふまえ、日本の国連安保理常任理事国入りの是非について自分の考えを持ち、他者の考えも取り入れながら考え、判断することができる。

(2) 本時の展開

学習事項	生徒の活動
1 前時の想起	学習の振り返りをし、資料の確認。
2 学習課題の確認	「今までの学習から、日本の安保理常任理事国入りの是非を問う
3 学習課題の追究	自分の意見→学習班で意見交流→発表→思考の再構成
4 本時のまとめ	学習の整理と次時の学習内容の確認

(3) 実践を終えて

前時までに、戦争・紛争に関する歴史の流れ、日本の国際貢献の事例、国際連合（特に安全保障理事会について）のしくみ、日本国憲法第9条と自衛隊の関係などについて学習していきました。学習する中で、日本の国際貢献としてイラクへの自衛隊派遣と憲法第9条の関係について多くの生徒がジレンマに陥っていました。最終的には、自衛隊派遣を止めるべきだという意見とまずは憲法第9条を改正することが先であるという意見に分かれました。ただし、どちらにしてもこのような重要な（国論を二分するような）内容について、どのようにして国民のコンセンサスを得るのかというところまで、考えを深めることはできませんでした。

また、本時の目標である、日本の国連安保理常任理事国入りの是非については、先ほど述べたジレンマを持ちつつ、国際連合憲章の内容と憲法第9条の整合性について、自分の考えにゆれが生じた生徒が半数以上いました（ゆれを生じたかという質問に対して、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた生徒が66%、「あてはまらない」が24%、「あてはまらない」が、10%）。ゆれが生じた理由は、学習する中で新たに知った知識や、学習班や学級での他者意見の交流によるものだと考えられます。自分の考えにゆれが生じなかった生徒は、自分以外の意見にふれることで、自分の意見の正当性をより確認した形になっていました。ただし、知識や情報が限られているため、本質的な学習の深まりになっているのか、今後の検討が必要だと考えられます。今回の単元で得られた成果をさらに吟味を深め、単元の修正・発展・開発に努めていくことが今後の課題です。

算数・数学科 実践事例

「くるくるたし算」

- ① 実施学年 第4学年
- ② 学習材

等しい数による組み合わせの3位数のたし算を計算問題として設定した。四角の中の3位数を時計回りと反時計回りで順にたし、和が等しくなることを理解し、そのきまりを使って自分でも問題を作ることができる。

くるくるたし算

月 日 () 年 組 ()

次の四角の中の数を、「スタート(左上の数)」からはじめて、
(1) 時計回りと (2) 反時計回りの順にたし算をしていきましょう。

(1) $123 + 345 + 567 + 781 =$

(2) $187 + 765 + 543 + 321 =$

→ (1)

(2)

1	2	3
8	X	4
7	6	5

- ③ 計算技能 3位数どうしのたし算
- ④ 気づかせたいこと
 - ・ (1)時計回りと(2)反時計回りの2つのたし算の和が等しいということ
 - ・ (1)時計回りと(2)反時計回りの2つのたし算の和が等しくなる理由
(一の位と十の位と百の位の数を別々に考えると、(1)も(2)も等しい数の組み合わせのたし算になっているから)
 - ・ ほかのくるくるたし算

学習展開例

学習事項	学習活動	教師の働きかけとねらい (集団)
1. 学習課題への接近	○くるくるたし算の計算の仕方を知り、問題に取り組む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> (1) 時計回りと(2)反時計回りの順にたし算をしてみましょう。 (1) $123 + 345 + 567 + 781 =$ (2) $187 + 765 + 543 + 321 =$ </div> ・おもしろそうだな。 ・正確に計算するぞ。	○3位数どうしのたし算の練習をすることを伝え、くるくるたし算のやり方の計算の仕方を説明する。 ・机間指導をし、正しく計算できるように支援をする。 評) 計算が正しくできたか。
2. 学習課題の設定	○計算練習をして気づいたことを発表し、学習課題を設定する。 ・答えが一緒だ。 ・どうして答えが一緒になるのか理由	○答え合わせをしなから(1)と(2)の答えが等しくなることを押さえ、なぜそうなるか

が知りたいな。

など

るのかという疑問を持たせ、学習課題を導く。認識を図る。

時計回りのたし算と反時計回りのたし算の和が等しくなる理由を考えよう。

3. 学習課題の追求
(自力解決)

(集団解決)

○ (1) と (2) の答えが等しくなる理由を考える。
・筆算ですると、百の位と十の位には同じ数が出てきているのが分かるね。
・百の位と十の位は同じ計算をしていたんだね。
・百の位と十の位は、数の組み合わせが変わっただけで、結局同じ数をたしているのだから答えは同じになるんだね。

など

○自分の活動を振り返ったり、改めて問題を見直したりすること
自分の考えを明らかにした上で、交流し、理解したりすること
より理解を深めたりすることができるようにする。
・どのようにしたらよいか分からない子どもには、筆算に数
の組み合わせに着目するとよいことを示唆する。
・集団解決の場合では、式や数
を示しながら説明をするように促す。

	百	十	一	
	1	2	3	
	3	4	5	
	5	6	7	
+	7	8	1	

16 16
・百の位も一の位も数の組み合わせが等しいので、答えも同じになることを押さえる。

評) (1) = (2) となる理由を考え理解することができたか。

4. 本時のまとめと発展

○見つけたきまりをもとに、自分で問題を作る。
・やってみたい。
・2×2マスでもできるよ。
・ぼくはこんなのを考えたよ。解いてみて!
・小数でもできるよ。

○本時のまとめとして、問題づくりを通して理解を深める。
(個) 理解度を自己評価できるようにする。

「分数のたし算」

① 実施学年 小学校第6学年

② 学習材

分子を自然数とし、分母の数だけ項を持ったし算を設定した。同分母分数の加法だけでなく、分数の大きさをとらえることや仮分数を帯分数にすること、そして、新たな学習内容である同値分数についての理解を深めることをねらいとした。また、和を数列としてとらえたときに規則性が見いだせるように、分母を2から10までの全9問とした。

チャレンジ計算

月 日

名前 ()

分数のたし算

① $\frac{1}{2} + \frac{2}{2} =$

② $\frac{1}{3} + \frac{2}{3} + \frac{3}{3} =$

③ $\frac{1}{4} + \frac{2}{4} + \frac{3}{4} + \frac{4}{4} =$

④ $\frac{1}{5} + \frac{2}{5} + \frac{3}{5} + \frac{4}{5} + \frac{5}{5} =$

⑤ $\frac{1}{6} + \frac{2}{6} + \frac{3}{6} + \frac{4}{6} + \frac{5}{6} + \frac{6}{6} =$

⑥ $\frac{1}{7} + \frac{2}{7} + \frac{3}{7} + \frac{4}{7} + \frac{5}{7} + \frac{6}{7} + \frac{7}{7} =$

⑦ $\frac{1}{8} + \frac{2}{8} + \frac{3}{8} + \frac{4}{8} + \frac{5}{8} + \frac{6}{8} + \frac{7}{8} + \frac{8}{8} =$

⑧ $\frac{1}{9} + \frac{2}{9} + \frac{3}{9} + \frac{4}{9} + \frac{5}{9} + \frac{6}{9} + \frac{7}{9} + \frac{8}{9} + \frac{9}{9} =$

⑨ $\frac{1}{10} + \frac{2}{10} + \frac{3}{10} + \frac{4}{10} + \frac{5}{10} + \frac{6}{10} + \frac{7}{10} + \frac{8}{10} + \frac{9}{10} + \frac{10}{10} =$

③ 計算技能 同分母分数のたし算（仮分数も扱う）

仮分数を帯分数に直す計算

④ 気づかせたいこと

- 計算の工夫
 - ・分子の和＝前の式の分子＋分母
 - ・分子を両側から2つずつたしていく
 - ・1を作る

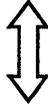
- 関係
 - ・和＝前の式の和＋ $\frac{1}{n}$
 - ・分母が奇数のとき

$$\text{和} = \left\{ (\text{分母} + 1) \div 2 \right\}$$

分母が偶数のとき

$$\text{和} = (\text{分母} \div 2 + \frac{1}{2})$$

授業過程

学習事項	学習活動	教師の働きかけとねらい	(集団)
1. 学習課題への接近	(1)問題に取り組む。 分数のたし算をしましょう。 $+ \frac{1}{\square} + \dots + \frac{2}{\square} = \frac{\square}{\square}$ <ul style="list-style-type: none"> ・おもしろそうだな。 ・ちょっとややこしいな。 ・頑張っ、速く計算するぞ。など 	①分数のたし算の練習をすること を伝え、意欲を持たせる。 ・机間指導し、正しくできていない子どもに支援する。 (評) 分数の加法の計算が正しくできたか。仮分数を帯分数に直すことができたか。	(全)↔(個) ドリルのやり方を押さえてから、計算練習を行う。
2. 学習課題の設定	(2)どのように計算したかふり返ることから、学習課題を設定する。 ・ずっと式通りに計算したよ。 ・1を作って計算したよ。 ・途中からきまりに気づいた。など <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">簡単な計算の仕方を見つけよう。</div>	②答え合わせの後、どのように計算したかを問うことで、学習課題を導き活動の見通しを持つことができるようにする。	(全) 互いのつぶやきなどから課題を設定していき、共通認識を図る。
3. 学習課題の追求 (自力解決)  (集団解決)	(3)簡単な計算の仕方を考える。 ア)1になるようにたしていきとよい。 イ)・分母が偶数のときは答えは分数、奇数のときは整数になっている。 ・分数の答えは、(整数 + $\frac{\square \div 2}{\square}$) になっている。 ・順番に $1\frac{1}{2}$, 2, $2\frac{1}{2}$ と、 $\frac{1}{2}$ ずつ増えているから、 $\frac{1}{2}$ をたせばよい。 など ↓ 和 = (前の式の和 + $\frac{1}{2}$) ウ)・分母が1増えると、分子の和は分母の数だけ増える。 など ↓ ・分子の和 = (前の式の分子の和 + 分母)	③自分の活動をふり返ったり、改めて問題を見直したりすることで、和が1になる分数や規則性を見つけることができるようにする。 ・自力解決の場合では、きまりに気づいている子どもには、そのような理由を考えるように促す。どのように考えればよいかわからない子どもには、式と式を比較したり、和を数列とみることを示唆する。 ・集団解決の場合では、式や数を示しながら説明するように促す。また、子どもの考えを分類して板書する。 和 = (前の式の和 + $\frac{1}{2}$) 分子の和 = (前の式の分子の和 + 分母の数) であることを押さえる。 ・分母が、 奇数のときは $\{(\square + 1) \div 2\}$ 偶数のときは $(\square \div 2 + \frac{1}{2})$ であることは適宜扱う。 (評) 規則性を見つけることができたか。	(個)↔(全) まず、集団解決の前に、自分の考えを明らかにすることができるようになる。そして、話し合いを通して理解したり理解を深めたりできるようにする。
4. 本時のまとめと発展	(4)適用・発展問題に取り組む。 分数のたし算をしましょう。 $\frac{2}{\square} + \frac{4}{\square} + \dots + \frac{\square \times 2}{\square} =$ <ul style="list-style-type: none"> ・こんどは自信があるぞ。 ・制限時間内に解くぞ。 ・今度は簡単にできた。 など 	④適用・発展問題に取り組ませ、理解を深めることができるようにする。 ・正しく計算することの大切さや規則性を利用することのよさを味わうことができるようにする。 ・(和 = $\square + 1$) であること、分子が 1, 2, 3... の計算の 2 倍になっていることなどは、適宜扱う。 (評) 正しく計算することができたか。	(個) 理解度や成長を自己評価できるようにする。

理科 実践事例

1. 授業実践の概要

(1) 授業のねらい

本実践では6年生の「ものの燃え方と空気」の単元において粒子モデルを導入し、子どもたちが粒子モデルを用いた学習に対してどのような印象を持ち、その因果に関する思考をどのように深め、知識や概念を習得したか、また、次年度迎える中学校理科に対してどの程度期待を高めたかについて考察することとした。授業の対象は第6学年2クラス計77名であった。授業は2004年5月に実施した。

(2) 授業の実際

授業では、第1次において底なし集気びんと粘土などを用いた実験を通して、物が燃えるためには空気の出入りが必要であることを明らかにしていった。また酸素、窒素、二酸化炭素について教師側から粒子モデルを導入し、実際の大きさ、空気中に含まれる量、呼び方などを紹介した。そして、それ以降の様々な実験の予想や結果のまとめと考察では、子ども達が粒子モデルを用いて考えを交流したり、実験計画を立てたりして学習が展開していった。第2次で、燃焼前後の各気体の割合の変化を調べた後、発展的な内容として、第3次では密閉した中でろうそくを燃やし、火が消えた後、実験装置の総重量が変化するかどうかを思考場面とした学習を展開した。その際、「二酸化炭素の発生で全体が重くなる」、あるいは「炭素がろうから発生したため総和の変化がない」といった対立した考えの交流が粒子モデルを用いてなされた。実験前は、二酸化炭素や炭素が増えるということ、そして二酸化炭素は他の気体より重いと考えて、前者の意見を支持する者が多数を占め、後者を支持する者は少数であった。しかし、実際に実験して電子天秤で量ったところ、実験装置全体で燃焼前と燃焼後で質量の総和に変化がないことが明らかになった。教師によるろうの成分の説明も参考にしながら、「ろうの中の炭素（厳密には水素も含む）が移動して酸素と結合しただけ、つまり単純に炭素が移動しただけであって、質量の総和は変わらない」ということを、子ども達はモデルを使いながらまとめていくことができた。

2. 授業実践の結果と考察

(1) 学期末テストでの定着度

当該単元の終了の1ヵ月後に行った学期末テストにおいて、実践した授業と同じ様な問題場面を問題文で提示したうえで、「実験装置全体の重さは変わったか」「その理由は何か」を記述式で回答させた。その回答結果をもとにして、粒子モデルを用いた学習に対する定着度を示したのが図1である。図1をみると、8割の子どもがほぼ正答に近い回答を示すことができていたことがわかる。すなわち、大部分の子どもが、ろうそくが燃えるときの变化や重さの総和が変化しなかったことについての因果関係を、酸素や炭素といった粒子モデルを用いて説明することができていたと言えるだろう。

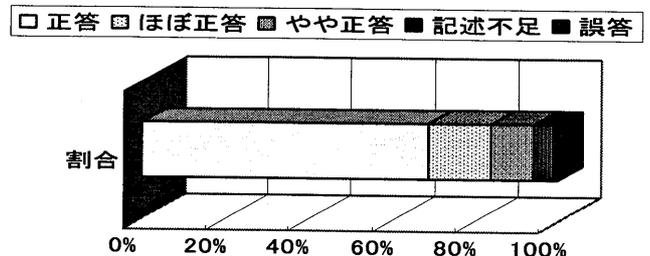


図1 定着度

(2) 単元終了時の調査

ここでは、単元の終了後に実施した質問紙調査の結果をもとにして、本授業実践の結果について考察する。

①粒子モデルの有効性について

「粒子モデルを使うと自分の考えが説明しやすいか」「粒子モデルを使うとわかりやすいか」について4件法で回答させた結果が図2・3である。図2・3より、8割を上回る子どもが説明のしやすさ・わかりやすさについて肯定的に捉えていることがわかる。

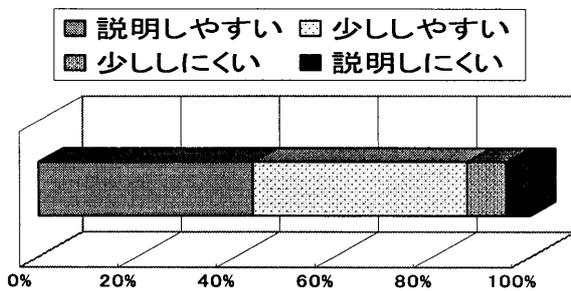


図2 説明のしやすさ

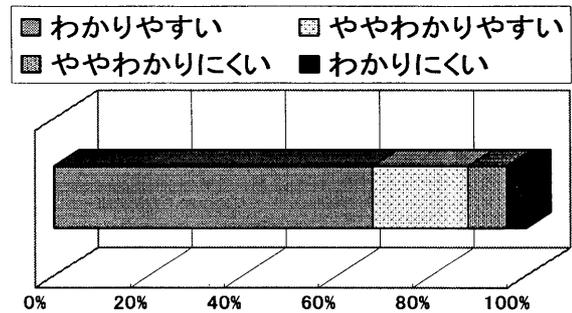


図3 わかりやすさ

ただし、児童の中には、それぞれの思考の交流場面でなかなか自分なりの考えを持ちにくい子どもや、モデルに対する抵抗感を感じた子どももいたことがうかがえる。

次に、「粒子モデルを使うと友だちの説明が理解しやすいか」について4件法で回答させた結果は、図4のようになった。ここでも9割近い子どもが友だちの説明の「理解しやすさ」を肯定的に捉えていた。また、その理由を自由記述で回答させた結果では、「わかりやすさ」「伝わりやすさ」「イメージのしやすさ」「変化や動きのわかりやすさ」といった回答が多く、この結果から、お互いの思考を交流する手段として粒子モデルが有効にはたらいていたといえるだろう。

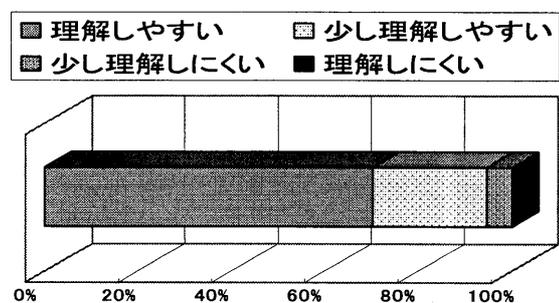


図4 友だちの説明がわかりやすいか

本実践における粒子モデルを用いた学習のように、中学校で学習することの基礎概念となるような学習内容を小学校で実施することに対する子ども達の考えを4件法で回答させた。図5では、9割を超える子ども達が小学校からでも問題ないという回答をしている。

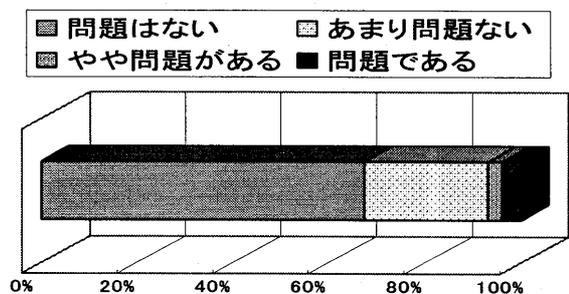


図5 小学校からでも問題はあるか

③中学校理科に対する期待について

今回のような内容を学習してみた結果、中学校理科が楽しみになったかどうかを4件法で回答させた。図6では、7割半程度の子どもが中学校での学習が「楽しみになった」または「やや楽しみになった」と肯定的な回答をしている。

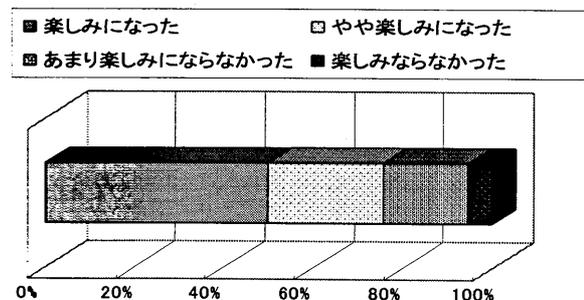


図6 中学校の理科が楽しみになったか

(3) 学期末テスト後の調査

当該単元の終了からほぼ1ヶ月後に実施した学期末テストに際し、中学校で学習するこ

との基礎概念となるような学習内容を小学校で実施したことに対する考えを自由記述式で回答させた。ただし、この回答結果には、「ものの燃え方と空気」の単元に基づく児童の考えだけでなく、その単元の後に実施した「人と動物のからだのはたらき」の単元での学習に対する児童の考えも含まれている。

回答の分析に際して、まず自由記述の回答をその要点によってカテゴリー化した。次に、これらのカテゴリー化した回答を、今回のような学習を肯定的に考えているものと否定的に考えているものとに分類し、それぞれ図 18 と図 19 に示した。

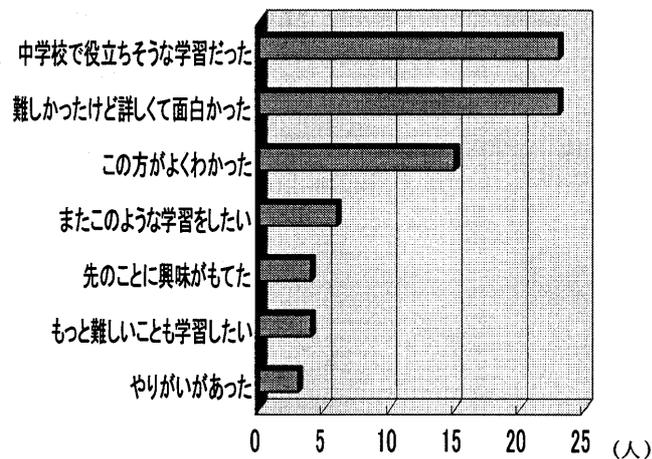


図 7 肯定的回答

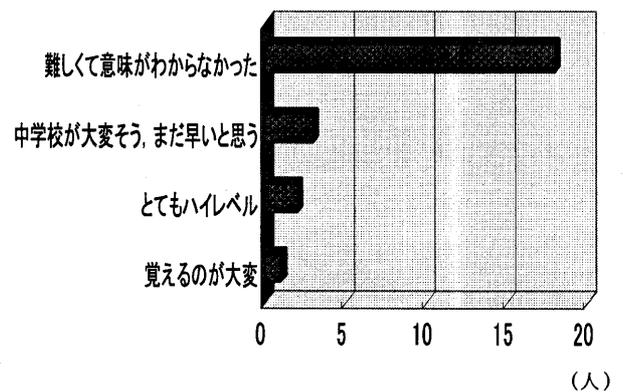


図 8 否定的回答

図 7 をみると、中学校での功利感、わかりやすさなどの回答が多いことがわかる。しかし、それに加え「難しかったけれども面白かった」という回答も比較的多く認められ、また少数ではあるが「もっと難しいことにも挑戦したい」「やりがいがあった」といった回答も見られた。これらの回答は、難しいと感じながらも複雑で深い内容を学習していくことに対する満足感・充実感に通じるものであり、学びの深まりに対する肯定的反応として解釈することができるだろう。もちろん、図 8 に示されているような否定的な回答は本実践の課題として反省すべき点である。特に「難しく意味がわからなかった」という回答が生じないような学習構成や学習指導のあり方に関する配慮や工夫が必要であったと考えられる。ただし、既に述べたように、期末テスト時のこれらの回答には、粒子モデルを使った「ものの燃え方と空気」の授業実践だけでなく、その後に実施した「人と動物のからだのはたらき」の単元に対する考えも含まれており、そこでの調べ学習発表会において「消化と呼吸」、「心肺機能」及び「内臓諸器官」に関する相当難しい発表が行われたことも、この結果に多少なりとも影響していたものと思われる。なお、肯定的な回答した児童と否定的な回答をした児童の割合は、図 9 のようであった。

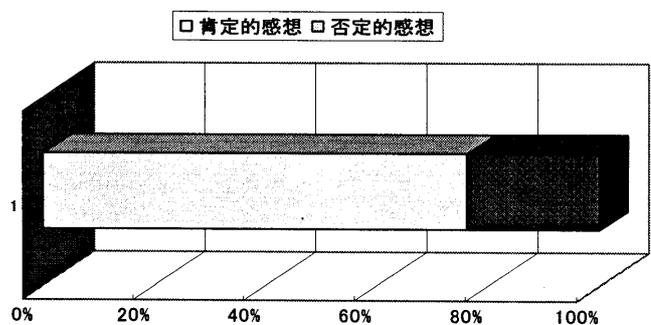


図 9 肯定的な回答者と否定的な回答者の割合

次に、児童が肯定的な回答をしていたか否定的な回答をしていたかという点と、

粒子モデルを用いた単元の学習に関する定着度との関連について検討しておきたい。その

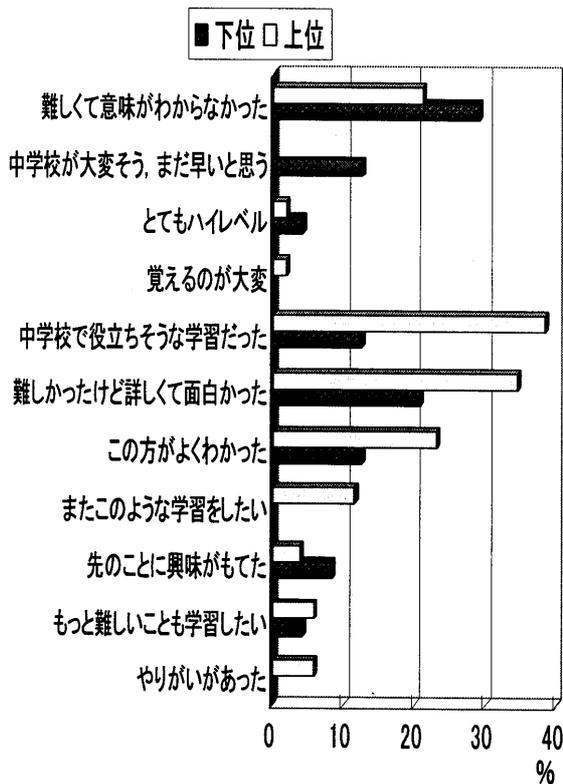


図 10 定着度による回答の差

ために、まず図 1 で示した定着度の結果において、「正答」の子ども達を上位、「ほぼ正答」を含むその他の者を下位として分類し、肯定的回答と否定的回答の各カテゴリーの回答者を、上位と下位に分けて整理した。その上で、上位及び下位の児童のうち、どれだけの割合の児童が各カテゴリーで回答していたのかを、図 10 に示した。図 10 をみると、「難しかったけれど詳しくて面白かった」「この方がよくわかった」「もっと難しいことを学習したい」といったカテゴリーの回答は、上位の者が多いものの、下位の者の中にも相当程度認められた。また、「中学校でも役立つそう」という回答は上位者の方がかなり多く、「やりがいがあった」「またこのような学習をしたい」といった回答は上位者のみにみられた。それに対して、「中学校が大変そう」という回答は下位者のみに、また「難しく意味が

分からなかった」という回答は下位者の方で多くみられた。

3. おわりに

授業後に実施した調査結果などをもとにこの授業実践について考察した結果、中学校で扱う分子・原子の考えに発展しうる粒子モデルを導入した学習に対し、多くの子ども達にその分かりやすさ、説明しやすさなどの有用感を実感させることができたことが明らかとなった。また、ものの燃え方に関する学習内容の理解において、高い定着度が認められた。

これらのことから、燃焼という現象における変化のようすやくみについて、多くの子ども達に粒子モデルを用いた学習によって理解を深めるとともに、粒子概念の基礎をいくらかでも養うことができたのではないかと考えられる。これは同時に、実際に目前で生じている現象についての因果関係に対する粒子モデルを用いた思考が、小学生でも機能していたことを示していると考えられる。

さらに、定着度が上位か下位かにかかわらず「難しかったけれど詳しくて面白かった」「この方がよくわかった」「もっと難しいことを学習したい」という感想を抱かせることができた。このように、粒子モデルを導入した「ものの燃え方」の授業実践により、中学校の理科に対する小学生の期待感を高めることができる可能性が示唆された。

しかしその一方で、幾つかの課題も明らかになった。例えば、「難しかった」「わからなかった」「覚えられなかった」と考える子どもが少なからず認められたことや、上位の子ども達にのみ「やりがい」が感得されていたこと、さらには、下位の子ども達にのみ中学校理科に対する不安を感じさせていたことなどは、粒子モデルを用いた今回の実践の改善すべき課題として受け止めなければならない。今後は、こうした課題を一つ一つ解決し、更なる実践の充実を図るとともに、小中一貫教育のよさを生かした、他の諸概念、諸知識、諸技能の育成のための学習の開発を続けていきたい。

音楽科 実践事例

(1) 題材名「ボディパーカッションに挑戦しよう！」

(2) 題材について

子どもたちに音楽を表現させようとする際、「音楽を感じて」とか「リズムにのって」と呼びかけはしても、なかなか身体全体で音楽を感じ取って表現するということは難しいことが多い。特に中学生ともなると人前で自分自身の表現をあらわにすることに消極的な生徒が増えてくる。そこで、音楽を「感じる」「イメージする」「コミュニケーションする」「表現を生み出す」「表現する」という一連の流れのなかで、「全身を使って音楽を体感させる」題材として「ボディパーカッション」を取り入れることとした。

「ボディパーカッション」を授業で扱うというのは、どちらかと言えば「小学生で」と思われがちである。しかし、中学生には中学生なりのボディパーカッションの授業の視点があるのではないかと考えた。そして、「身体の一部を使って音を出す、特に楽器を用意する必要がないので気軽にできる、全身でリズムを感じて表現していく」という従来のねらいや効果と併せて、全身を使ってのボディパーカッションを構成させたり、ダイナミックな表現をつくり出させたりするなど、中学生にボディパーカッションを体感させる視点を持って授業を組み立てることができるのではないかと考えた。

そこで中学校3年生を対象学年とし、ボディパーカッションの授業を次のように展開することとした。

(3) 対象学年 中学校3年生 80名

(4) 実践時期 平成16年7月中旬～9月

(5) 教材曲 EXILE「real world」など

(6) 題材の目標

- 教材曲をしっかりきくことで、身体でどのような音を表現すればよいか感じることができるようにする。(感じる力)
- 「感じた音をどのように表現するか」「身体のどの部位をたたけば自分たちの欲する音が表現することができるのか」などをイメージさせることができるようにする。(イメージする力)
- 各グループでしっかりとコミュニケーションさせることで、グループの独創性を生み出すことができるようにする。(コミュニケーション力)
- 教材曲をきくことでイメージした音をどのようにして表現するかを考えさせたり、その動きを構成させたりする。(表現を生み出す力)
- イメージした表現を実際に全身を使ってグループで協力しながら表現できるようにする。(表現する力)

(7) 学習計画 (4時間扱い)

第1次	ボディパーカッションって何だろう？・・・・・・・・・・・・・・・・	1時間
第2次	グループで協力してボディパーカッションをつくろう・・・・・・・・	2時間
第3次	ボディパーカッションを発表しよう・・・・・・・・・・・・・・・・	1時間

(8) 学習の流れ

ボディパーカッションの授業の導入として、身体を使って音を表現している様子が伝わるビデオを視聴させることにした。それは、「フラメンコ」や自分たちが創造した文化祭のときの「エイサー」や「熊蜂の飛行」に合わせてボディパーカッションをやっているビデオである。それから、ボディパーカッションの効果やねらいについて考えさせたり、リズム練習させたりして、全身を使ってリズムを表現できるようにすることを呼びかけていった。各クラス8グループに分けオリジナルのボディパーカッションを生み出すことができるように取り組ませていった。

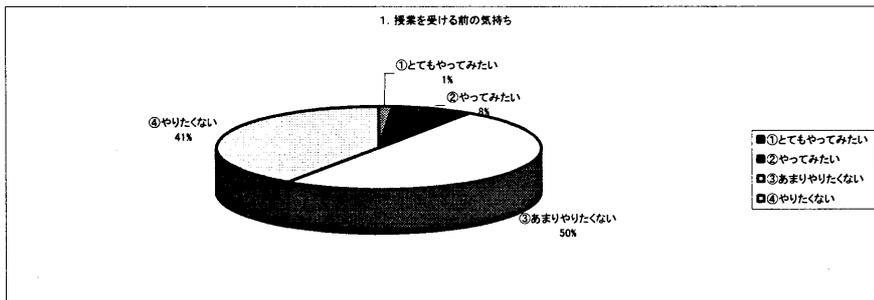
EXILEの「real world」は、パーカッションの音を生み出すことができるような曲想であることやノリがよいことに着目し選曲した。

生徒が創作する際には①みんなで同じリズムを打つ②パート別にリズムを振り分けるの2つの方策を提示した。②の例としては、ドラムセットなどをイメージさせるようにした。

課題追求にあたって特に指導したことは、「自分たちはどのような音がほしいのか」ということに気づかせることである。欲しい音の高低によってたたき方や身体の部位が違ってくるからである。

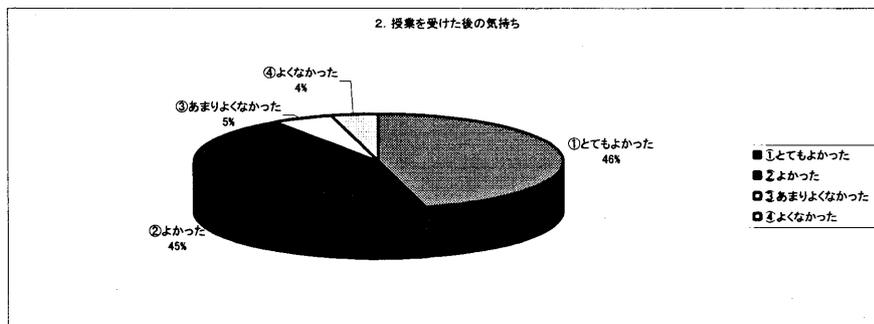
(9) アンケート結果から

授業前の生徒たちの「ボディパーカッション」に対する思いは決してよいものではなかった。次の表は、授業前のアンケート調査によるものである。



③「あまりやりたくない」④「やりたくない」の理由として、「はずかしい」がダントツで「どうやってやっていいかわからない」「自己表現が苦手」などが見られた。

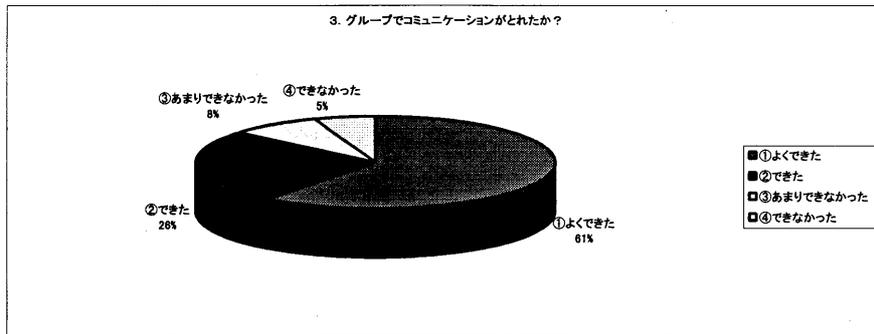
しかし、授業後のアンケートでは生徒たちの思いが変化した様子がわかる。授業前に「やってみたい」と思っていた生徒が全体の9%だけだったのが、授業後は「やってよかった」と感じた生徒が全体の91%にもものぼっている。



ボディパーカッションの授業やってみて①「とてもよかった」②「よかった」と思った理由として、「リズムにのるのが楽しかった」「みんなの考えたものが個性的で見えて楽

しかった」「グループで協力してできた」などがあげられていた。

次の表は「課題追求のときにグループでコミュニケーションをとることができたか」という問いについてのものである。



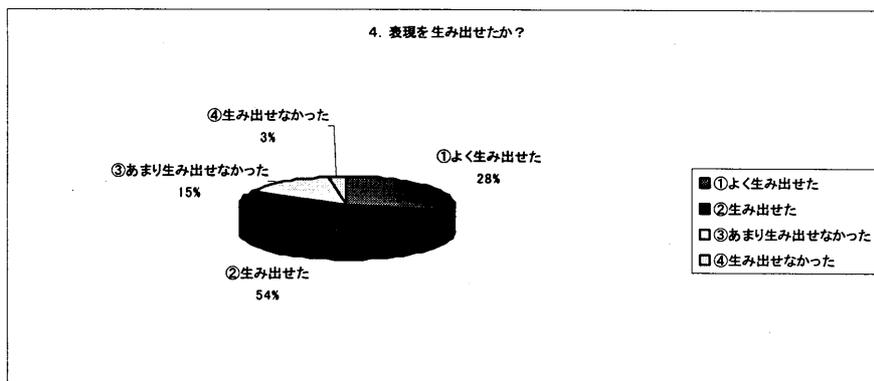
87%の生徒が①「よくできた」②「できた」と回答している。その理由は、

- ・ みんなで「ここどうする？」と話し合ったり一緒に困ったりしたから。完成してそろったときの喜びを分かち合えたから。
- ・ みんなでどうやろうか、必死に考えることができたから。何か考えが思いついたときには楽しくてみんなでがんばれたから。
- ・ たくさん意見を出せたから。
- ・ わからないリズムを教えてもらえたから。
- ・ みんなと協力し合い、発表を成功させることができたから。

などグループ内で意見交換し合い、成果を感じることもできたことが大半であった。

③「あまりできなかった」④「できなかった」と回答したものの主な理由は、「あまり話をしない人といっしょだったからぎこちなかった」「協力できなかったから」などグループの人間関係に起因するものが見られた。

最後に課題追求を通して「音楽的な表現を生み出せること」につながったと思うか？という問いにたいして、82%の生徒が「生み出した」と思っていると回答している。



その理由としては、

- ・ 今までとは違う身体をつかった表現をつくることができたから。
- ・ リズムをとるむずかしさがよくわかった。個々でリズム感が違うことがわかったし、その人たちと一緒にやるというところに表現があると思う。
- ・ 音の重なりがよかったから。
- ・ 各自の思い思いの音楽をみんなで合わせられて新しい音楽になったから。
- ・ 皆で協力して楽しかったから。
- ・ 真剣に音楽をきいたり，リズムをとったり，身体をつかったりできたから。
- ・ みんなそれぞれ違う発想で，いろいろなリズムがあるんだなと感じることができたから。
- ・ 協力することが生み出すことにつながったから。
- ・ 最後にみんなで合わせたときにきれいにかさなっていたから。

などがあげられていた。

生み出せなかったと回答した生徒の理由は「グループで協力できなかったから」「だれでも考えるようなことしか思いつかなかったから」「どのようにつくればいいかわからなかったので，最初はあまりつくる活動ができなかったから」などであった。

(10) 成果と課題

- ・ 音のバリエーション，音のバランス，どの部位を使えばより効果的な音を表現することができるか，などを個人やグループで考えさせることでより豊かな表現を生み出すための工夫をさせることができた。
- ・ みんなが同じ動きをするのではなくパートに分かれて表現させたり，全員で同じ音を出すときでもタイミングをずらして演奏させることで，ボディパーカッションが視覚的にも楽しめることを体感させることができた。発表者と鑑賞者を一体化してお互いに実りのある発表をすることができたといえよう。
- ・ 「まわりといかにコラボレーションしながらまとまりをつくっていくかが大切である」という生徒感想に代表されるように，グループのメンバーがお互いに協力して表現することのすばらしさを体感させることができた。
- ・ 生徒感想のなかに「ボディパーカッションをつくるには想像力の豊かさが必要である。思いついたことは積極的に発言していく」とかかれたものがあった。「イメージしたことを積極的に発言することが，自分たちの表現を豊かにすることへの足がかりとなる」ということへの指針となる発言であると思われる。
- ・ グループ編成の工夫が必要である。男女混合，男女別，偶然性のグループ，意図的なグループなど考えられるが，その編成によっては活動自体に支障をきたらすことがあるので細心の注意が必要である。それと同時に，ふだんの活動の際から支持的風土を醸成できるような取り組みをする必要がある。
- ・ ボディパーカッションの創作のときには，音の高低，音の強弱，リズムなどの音楽的要素に着目をさせるという意図があるが，楽しさを追求するあまりパフォーマンスに気をとられすぎないように配慮しなければならない。

図工・美術科 実践事例

○学年：広島大学附属三原中学校3年 80名

○実施時期：平成16年10月28日～11月18日

○題材名：「クリップビデオをつくろう」

○題材について

本題材は、与えられたモチーフからイメージする短い映像を編集してつなぎ合わせた作品（クリップビデオアート）を制作するというものである。子どもたちはテーマとなるモチーフからイメージされる映像を現実から切りとるべく学園敷地内の自由な場所をデジタルビデオカメラで撮影し、それをPC上で編集した作品を鑑賞しあう。7月に校内をデジタルカメラで撮影しPC上で白黒化して鑑賞しあうという学習を試みたが、この題材はその発展型として位置付けている。前回の題材は、自由に校内を周りながら心に響いた一隅をカメラで切りとる、という活動であった。本題材は自分たちがイメージした映像を「探す」という活動になるため、より積極的に自分たちを取り巻く日常風景を美的な目でみわたし「創造的にみる」というみ方を深めさせることができると考える。

○子どもの実態

本学年のこどもはマルチメディア学習を通しデジタル機器の扱いには長けているが、これらのデジタル機器を美術の表現手段として用いた経験は前回の「白黒写真」での活動のみであり、多いとは言えない。これまで子どもたちは動画や静止画を「伝達的手段」として捉え、情報をいかに正確に伝えるかという視点で学習をしてきた。したがって、切りとってきた映像の構図や色彩などの美的要素にはあまり注意が払われていないものが多かった。それゆえ「白黒写真」の授業は大変印象深かったらしく、事後アンケートでは全員が「面白かった」「またやってみたい」と答えている。さらに「もっとアングルを変えて撮れば良かった」「白黒の状態を考えながら撮るのは難しかったが、自分なりに工夫した」等、自分の美的感覚に照らし合わせて風景を切りとろうとしていたことが伺える感想も多く見られた。

○指導にあたって

「情報を正確に」という視点だけではなく、美的な視点を映像に加えるという活動を、楽しく味わわせたい。映像を「美しく撮る」ことは子どもたちにとっては初めての活動のため、構図や色彩に注意を払って創られた映像を参考作品として提示したり、テーマとなるモチーフから想像する映像イメージをブレーストーミングで出し合わせるなどの活動を組むことで、スムーズにイメージ化出来るようにしたい。5人1組で2クラス併せて16班出来るが、テーマとなるモチーフを4種類（漢字・音楽・CG画像・色）用意し、同じモチーフをテーマにした班が4つずつ出来るように設定した。このことにより、同じモチーフで異なる作品が4つずつ存在することになるため、それらを比較鑑賞することが出来る。また鑑賞会では、再び班ごとのブレーストーミングをとりいれて「みる」ことへの意欲を高めたい。さらにモチーフから受ける自分のイメージを確定した後に友達の創った映像を鑑賞し感想を出し合うことで、多様なみ方や感じ方があることを体感させたい。

○目標

- ・自分を取り巻く日常の中に美しさ・面白さを発見する喜びを味わわせる。
く③生活に取り込む実践力
- ・映像で表現する技法を知り、さらに表現を高めるための工夫ができるようにする。
く②多様な美術の受容と発信の力
- ・美術の多様なあり方に触れさせ、日常生活を美意識を持ってみつめ直す意欲を持たせる。
く③生活に取り込む実践力

○計画（全5時間）

第1次 音楽から映像をイメージしよう……0.5時間

第2次 学園内を撮影しPCで編集しよう……3.5時間

第3次 作品を互いに鑑賞しよう………1時間

○授業の実際

【第1次 音楽から映像をイメージしよう】

平成16年10月28日(木) 3校時

ブレーストーミングで色々なイメージを出し合おう

「今回の授業は『マル秘ミッション』で班別に映像作品を作ってもらいます」という教師の投げかけに、早くも子どもたちはざわざわと興味を持った様子を示し、近くの友達と「どんなんだろう、面白そう」と話をしている。映像の授業はマルチメディア学習でもやっているが美術でつくる映像は「情報の伝達」よりも「美しさ」に重点を置いて撮って欲しいという制作のねらいを押さえた。そのうえで、課題(授業ではミッションという表現を使った)は漢字・画像・音楽・色4種類があることを伝え、課題から映像をイメージして絞り込んでいく練習を「音楽」を使ってやってみようと思ひかけた。子どもたちは他教科の授業でブレーストーミングを体験しており、音楽から受けた映像のイメージを5人の班内で次々と出し合う活動を楽しんでいた。



【「雪が降っているとか。」白のイメージを出し合う。】

【第2次 学園内を撮影しPCで編集しよう】

平成16年10月28日, 11月2日, 5日, 8日

美しく撮るってどうやったらいいのだろう?

くじ引きで自分の班の課題が決定すると、子どもたちは頭をつきあわせて自分たちの課題からイメージできる映像をブレーストーミングで出し合い始めた。その中から撮影可

能なイメージを絞り込み、早い班は撮影に出かけ始めた。

どの班もおよそ2時間でイメージに近い映像を撮影しきり、残りの1時間でノンリニア編集を行い音楽もつけることが出来た。小道具を自宅から持ってきたり、逆光や影の使い方を工夫したりしてプロモーションビデオのような映像を志向する班もあった。



【どんな風に撮れているかな】

【第3次 作品を互いに鑑賞しよう】

平成16年11月11日

イメージはそれぞれ ～お互いの作品を鑑賞しあおう～

各班の作品は高画質のMPEGファイルに出力したため、パソコン室から美術室へデータを持ち出している鑑賞発表会が可能となった。発表会に先立ってもう一度「情報伝達のための映像」ではなく美しさに主眼を置いた制作だったことと、友達の作品のどこが美しいのかを味わいながら鑑賞しあうことを確認した。

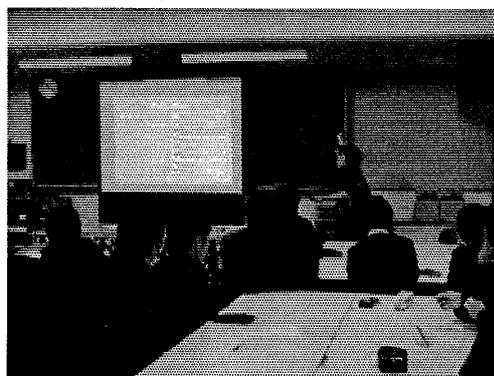
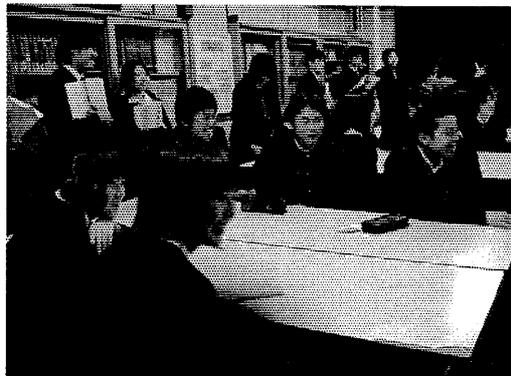
ところで、これまではふせておいたこととして、実は同じ学級内に全く同じミッションで映像制作をした班が自分たち以外にそれぞれもう1班ずつあったという種明かしをすると子どもたちは騒然となり、早くその映像をみたいという気持ちが高まっていった。

実際に作品映像をみる前に、課題となった色(今回白とした)や音楽(著作権フリー音楽集から選んだハープ調の曲)で班ごとにブレインストーミングをさせた。このことにより映像制作を担当した班のイメージ作りの過程を追体験することができ、「自分たちならこういう映像をつくる」という自分のイメージと作品の提示するイメージを比較しながら鑑賞することが出来た。

授業の度に記録してきた感想・反省から、子どもたちが多様なイメージの広がりを楽しみ、身の回りの美を発見しながら制作にも鑑賞にも意欲的に取り組んでいたことが伺えた。2点紹介する。

みんなで出したイメージをくっつけたり並べたりして、撮影可能なものを絞った。意外な組み合わせで面白い絵が撮れた。売店の前の水たまりが光るところが気に入っている。編集と音楽を入れるのが楽しみ。

同じ音楽で自分たちは理科のビデオとかで花が わぁっと開くのをイメージしたが，作品はサスペンスというか不思議で少し怖いような雰囲気だった。全然違う物をイメージするのは面白い。



【さあ，今度はどこの班を見ようか】

【わぁ，こんなふうに撮れるんだ】

○成果と課題

絵画や工芸だけでなく「映像」もまた美術なのだということを強く子ども達に感じさせることが出来た。既存の美術学習で身につけてきた色彩感覚や構図などを生かしながら，新しく「動き」「カメラワーク」「音楽」などの要素を加えて総合的に自分の美しさに対する感性を高めていくことが出来る題材であると考ええる。

また，生活の場所である校内を改めて「美しさ」を意識した目でみつめさせ，白黒写真の授業とともに，日常の中に美を発見する感性を養うきっかけにもなった。

しかし映像の授業は，撮影や編集などの機材の問題や子どものスキルの問題など，クリアすべき課題も多い。本実践では幸いにも機材やスキル面での問題はほとんどないが，その状態で初めて，映像美とは何かについて制作を通して考えさせていくことが出来る。指導者の研修も欠かせない現在進行形の題材であり，これからも継続的・実践的に研究していきたいと考えている。

体育科 実践事例

体育科 実践事例①「状況判断能力の育成に視点をあてたボール運動の実践から」

学 年：小学校第4学年
単元名：ゲーム（リバウンドボール）
実施月日：2004年11月

①単元について

高学年のバスケットボールにつながる教材として、中学年でポートボールの授業が行われる例が多い。しかし、ゲームの中では、技能の高い児童が中心になってボールを運びそのまま得点につながる場合が多く見られる。そのために、技能の低い児童は、勝敗に対する楽しみは味わえても、ゲームに進んで参加したという満足感を感じられていない。さらに、ゲームではゴールを目指しての直線的な動きや縦パスが多く、状況判断能力に欠けた様相が見られる。そこで状況判断能力に視点をあてて、バスケットボールにつながる混合型ボール運動としてリバウンドボールをとりあげた。リバウンドボールは、ドリブルをなくして自由に動けるようにし、バスケットボールのボードにシュートして、はね返ってきたボールを自分以外の味方がキャッチすると得点になるゲームである。そのため戦術面での視点がはっきりし、話し合いでの活動が具体的にになると考え、ポートボールにかえて4年生でリバウンドボールをカリキュラムの中に入れて指導することにした。

リバウンドボールの特徴として、

- ゴールの目標が大きくシュートしやすい。
- 空中でのリバウンドのボールの取り合いがある。
- ドリブルをなくすことで視野がひろがり、状況判断能力を養える。
- ボール運動が苦手な児童にも得点のチャンスが生まれる。 が考えられる。

指導にあたっては、リバウンドしたボールをキャッチすると得点になるということから、どんな作戦を立てていったらよいのか、チームの特徴を生かしたものを考えさせていった。また、試合ではタッチルールを採用し、タッチされたら3秒以内にボールを離すことにし、パスやシュートの回数が増えるようにしていき、より発展した運動になっていくようにルールも工夫しながらすすめていった。

②単元の目標

- お互いに励まし合ったり認めあったりしながら、力を合わせて楽しくゲームができるようにする。
- みんなでルールを考えながら、チームの特徴に応じた攻め方や守り方を工夫することができるようにする。
- チームのめあてや作戦に応じた動きで、走る・投げる・捕るの能力を伸ばしゲームに参加することができる。
- ルールを正しく理解しながら、審判をすることができる。

③計 画（全8時間）

第1次	オリエンテーション	・・・・・・・・	1時間
第2次	チームの練習と作戦づくり	・・・・・・・・	2時間
第3次	ためしのゲームとルールづくり	・・・・・・・・	3時間
第4次	リバウンドボール大会をしよう	・・・・・・・・	2時間

④授業の実際

(1) オリエンテーションでは、バスケットボールのボードに投げて時間内に捕る競争を班ごとにした。子どもたちは、初めのうちは捕れなかったが次第に捕れるようになり、投げる角度や強さ、どの位置で捕れるかが理解できるようになって楽しくすることができた。その後これを使ってゲームにできないか考えさせた。するとバスケットのコートを使ってのゲームを提案する児童がおり、実際にさてみた。児童にはたいへん好評で、次回から、ルールをみんなで考えていくことにした。

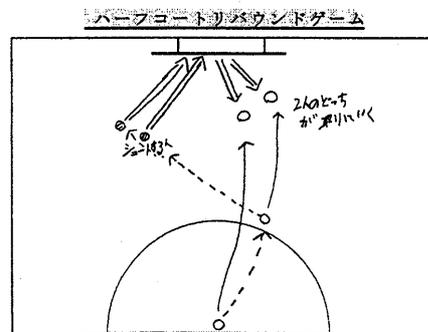
(2) ルールを確認してハーフコートでの練習をしていった。それぞれの班で簡単な作戦をたてて、ミニゲームを繰り返していった。ゲームになると自分たちの作戦通りにいかないことが多くなり、作戦カードや練習時間を要求するチームが増え意欲的に取り組んでいった。また、チーム内で個々の特徴を生かして役割分担をするチームもあらわれてきた。

(3) フルコートを使ってのゲームでは、チームごとに特徴を生かして複数の作戦を立てて試合に臨んだ。ゲームではタッチルールやマナーについて子どもたちから不満が出て、話し合いながら試合を進めていった。ねらいとしていたリバウンドの競り合いや効果的なパスのつながりが見られ、作戦を意識して試合をする班もあった。

(4) ゲーム大会では、勝敗だけを意識するのではなく、みんなで励まし合って楽しくゲームができるとともに、相手チームを意識した攻め方や守り方も考えて作戦を立て、学習を進めていった。授業後、子どもたちにリバウンドゲームの楽しさについて聞いたところ、「シュートができたこと」「リバウンドの取り合い」「パスのつながり」「チームでの協力」をあげていた。

⑤考 察

今回の実践は、子どもたちにとって初めて経験するゲームであったが、試合の中では活発に動く姿が見られた。それは、リバウンドのボールをとることで初めて得点になるという楽しさやドリブルをなくしてタッチルールにすることでトラブルが少なくなり、どの子にとっても、自分のもっている技能で十分に運動することができからだと考える。また、シュートするとき得点になるために周りを見て、味方の状況を判断してシュートしたり、リバウンドボールを受けるための位置どりを行う動きも見られバスケットボールにつながる動きができた。今後さらにバスケットボールに近づけるためには、プレーの制約を増やして、バスケットボールのルールに近づける必要があると考える。



選手 ○ パス……………動き……………シュート・リバウンド

(2) 天王)グループ
○今日のチームの作戦

シュートのうまい人にパスを多くしていく。
リバウンドは2人1組取り合いに行こうとする。
声を出してチームワークをよくする。

○チームのよりかえり
・ゲームで協力して作戦が立てられましたか。(○) ○ △)
・作戦を気にしながら試合ができましたか。(○) ○ △)
・自分たちの立てた作戦が使えましたか。(○) ○ △)



体育科 実践事例② 「小中教員によるT・T実践から」

学 年：中学校第1学年
 単 元 名：陸上競技（短距離走）
 実施月日：2004年10月

(1) 本单元におけるT・T授業のねらい

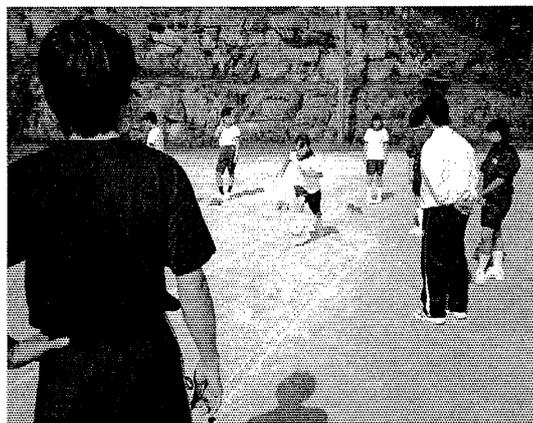
本学園は同じ敷地内に小学校と中学校が隣接していながら体育科においては授業時間割等の関係から教師による相互乗り入れによる指導を行うことはできていなかった。今年度も日常的に小中の教員が相互に授業に出向いていくことはできていない状況ではあるが、

- 種目によるT・Tの有効性の検討
- 授業場面によるT・Tの有効性の検討

を小学校児童と中学校生徒のT・T授業に対する意識の調査と、T・T授業の分析をもとに行い、今後に向けて小中の教員によるT・Tのあり方を探ることとした。

(2) 授業の実際(本時 3/10 T1・T2・T3)

短距離走のスタート場面の学習であった。0m～10m、10m～20mのタイムと歩数を記録し、生徒相互の観察によってフォームを修正していった。3名の教師は教師の目から見たフォームの良さや修正ポイントについてアドバイスを送った。



(3) 結果と考察

- アンケート結果
 - ・今日の学習は先生三人とみなさんとで学習をしました。
 - このことについてどう感じましたか。

	よかった	特になにも思わない	よくなかった
男子	12人	10人	0人
女子	12人	7人	0人

- 理由について

よかった	特になにも思わない
<ul style="list-style-type: none"> ・今日の先生は6年生の時の担任の先生で久しぶりに話したりして懐かしい思いができました。 ・一人の先生だけでなく、二人も増えたので、三人の先生に教えてもらうことになったので、いろいろなアドバイスをもらえたと思うのでよかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いてもいなくてもがんばることは変わりないから ・気にならない ・別に教えてもらったこともなかったし、自分には関係がないから ・別に変な感じではなかった。でも、一人の先生より二人の先生の方がいろいろ

<ul style="list-style-type: none"> ・一人の先生だと他の人が質問をしていてできなかつたということがあって二人の先生が来ていろいろ話もできて楽しかったです。 ・三人の先生だったらいろいろ教えてもらうことができたから良かったです。 ・いつもよりたくさん教えてもらえたから。 ・いろんなアドバイスをもらうことができるから。 ・個人個人にアドバイスが多くていいと思いました。 ・いろんなところをみてくれてフォームなど直りやすくていい。 ・自分のフォームのよし悪しがよくわかった。 ・スターティングブロックをどちらを前にすればいいか教えてくれたから。 ・久しぶりにあえて一緒に学べたので良かったし、うれしかったです。それにいろいろ教えてくださったので良かったです。 ・教えてもらったりは良かったけど、みられているのが恥ずかしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> るとアドバイスをもらえるのでよかったですと思います。 ・何も言われていないから。 ・小学校の時の先生で知っているから。 ・アドバイスをもらったわけでもないので別に何も思わなかった。 ・走るのに一生懸命になりすぎてあまり何も思いませんでした。 ・自分たちで進める活動だから。 ・特に何もなかったから。
--	---

③考察

- 本時ではT2は小学校における学級担任であった。そのためT2に入ることに對して生徒にも教師にも違和感があまり感じられなかつた。このことは「特になにも思わない」とした生徒の理由の中に「気にならない」「小学校の時の先生で知っているから」「別に変な感じではなかつた」と違和感のなさを挙げている生徒が見られることから分かる。短距離は個人種目であるため一人ひとりにアドバイスをおくることで生徒はTTの有用感を強く感じている。しかし、T2のアドバイスを受けなかつた生徒や小学校担任学級外の生徒はT2の存在をあまり意識していない。TTで授業を行う場合、まず人間関係のできていない生徒からアドバイスしていくなどの配慮が必要であると考え。
- 小学校教師から見て、中学校での体育は細かい学習カードにも表れるようにより高い専門性が感じられる。生徒の知的好奇心を高める授業であると本時の授業に参加して思った。それは教師による一方的な指導に終始するのではなく、教師と生徒とのやりとりの中で生徒自身に学びの主体性を持たせるようになったことが大きな要因であろうと感じた。今後は、指導していく上で教師間で、児童、生徒一人一人の実態を相互に交換できる機会やそのためのシステム作りが大切であると考え。また、授業の実施にともなう指導案、指導方法について事前に話し合い、充実させていくなど、効率的に行えるよう条件作りをする必要もあると考え。

体育科におけるTT実践から見えるもの

広島大学附属三原学園 保健体育科

矢藤 真二郎

下野 素文

宮本 浩嗣

1. はじめに

本学園は小中一貫教育のあり方について継続して研究を行っている。これまで、児童・生徒の発育発達段階を見通してのカリキュラムづくりを中心に研究を進めてきた。しかしながら、肝心の教員相互の乗り入れや体育科におけるTTについての教員間の連携について、また、小学校と中学校の授業スタイルの違いに関しては昨年度からの大きな課題であった。

これらの課題のうち、小学校と中学校の授業スタイルについて、特に中学校の授業においては教師からの説明・指示が中心の授業になる傾向が強く、小学校・中学校間の学習の進め方について検討する必要があるがあった。そこで、今年度は授業研究を通して、児童・生徒がより主体的に学ぶ意欲づくりのために

- ①児童・生徒相互の動きの観察場面を多く取り入れる
- ②学習係など児童・生徒による主体的な学習づくりの場面を設けていく
- ③教師からの指導は当然不可欠であるけれども、児童・生徒自身による思考場面

をより多くとり入れることで児童・生徒による「わかる」がふえるようにしていく。

などの、方向性を小中一貫で確認し、授業を展開していくこととした。

さて、本学園は同じ敷地内に小学校と中学校が隣接していながら体育科においては授業時間割等の関係から教師による相互乗り入れによる指導を行うことはできていなかった。今年度も日常的に小中の教員が相互に授業に出向いていくことはできていない状況ではあるが、

- 種目によるTTの有効性の検討
- 授業場面によるTTの有効性の検討

を小学校児童と中学校生徒のTT授業に対する意識の調査と、TT授業の分析をもとに行い、今後に向けて小中の教員によるTTのあり方を探ることとした。

2. 調査の方法

(1) 調査対象学年と単元

- 小学校5年生(男女) 跳び箱運動
- 小学校6年生(男女) フラッグフットボール

中学校1年生（男女） 短距離走
中学校2年生（女子） ティーボール

(2) 調査方法

授業後，TT授業についてのアンケートを実施した。その内容は，TTによる授業の有用感を三件法で問い，さらにその理由を自由記述とした。

家庭科 実践事例

1. 実践事例

○題材名「よく見て考えよう 買い物名人」

○学 年 6年11学級

○実施時期 平成16年12月

○授業づくりの視点

情報化社会の中で身近な情報を活用して目的にあった商品を選ぶ力や計画的に金銭を使う力、地球環境に優しい買い方ができる力を身につけることを目的に、買い物シミュレーション活動を行いそこで見つけた買い方ポイントを実際の買い物場面で活用させて、学んだことの日常化を図る。

○題材観

近年、わたしたちの消費生活は複雑化している。購買意欲をあおる情報は巷にあふれ、生産者や販売者とのつながりも希薄化している中、消費者には正しい情報をきちんと捉え自らの判断で、本当に自分に必要な物を決定する能力が求められている。サービスや商品のターゲットは低年齢化しており、小学生の段階から消費者としての自覚を育てていく必要があると考える。本題材では、商品の購入の仕方を品質・安全性・経済性・計画性などの点と、地球環境への負荷の少ない買い方の点から学習し、目的にあった商品の選び方や計画的な金銭の使い方を考え、情報を活用した買い物ができるようにすることをねらいとする。

○児童観

事前調査（平成16，11，8 39名）によると、子どもたちがよく買うものとしては本や雑誌，パン・ジュース・お菓子などの食品，学用品が多い。買うときに気をつけていることとしては価格や必要性，好みなどが多く，品質や計画性などについてはあまり留意していないことが分かった。買い物の失敗体験としては「家にも同じようなものがあった」「買ったけれども使わなかった」「すぐに壊れた」「他の店の方が安かった」などがあり，情報を活用して買い物をしようとしている子どもは少ない実態がある。

○指導観

題材に入る前に，家庭生活における買い物にまつわるエピソードを調査し，第1次ではそれらを元に本題材の学習計画を立てる。第2次では，買い物の失敗体験を例に買い物の仕方のポイントを数項目にまとめる。そして，それらの項目を買い物シミュレーションの中で試し，商品に関する情報の選択を問題にしながら話し合う中で，よりよい買い物の仕方についてまとめる。更に，地球環境にかかる負荷の少ない購入の方法についても話し合い，生産者や販売者側の努力にも気づかせる中で，これらの情報も活用することの大切さに気づかせる。第3次では実際の買い物活動を行い，レシートの活用なども含め学んだことの日常化を図る。なお，本題材においては中学校教師もT.Tとして授業を行い，より専門的な見地からの指導を行うようにする。

○題材の目標

- ・ 買い物の仕方や金銭の使い方に関心を持ち、家庭生活に生かそうとする意欲を持たせる。
- ・ 買い物に当たっては、情報を活用する等の工夫をすることができるようにする。
- ・ 生活の中で、品物を選んだり、金銭を計画的に使ったりすることができるようにする。
- ・ 買い物に必要な情報の的確な読み方を理解させる。

○指導計画

- 第1次 買い物体験を交流し、学習計画を立てよう……………1時間
- 第2次 よりよい買い物の仕方を学ぼう……………3時間 (本時2/3)
- ・ 失敗しない買い物の仕方を考える ……………1時間
 - ・ 買い物シミュレーションで試す ……………1時間
 - ・ 買い方による地球環境への負荷を考える……………1時間
- 第3次 買い物に行ってお金を計画的に使おう……………2時間

○本時の目標

前時にまとめた「買い方ポイント」を買い物シミュレーションで試し、問題になったことの解決方法を話し合う活動を通して、買い物をするとき気をつける点を新たな角度からまとめる。

《準備物》 T：「買い方ポイント」をまとめた紙、買い物シミュレーションに必要な品物、ワークシート

■学習過程

学習事項	児童の活動	教師の働きかけとねらい	
		小学校教師	中学校教師
1 学習課題への接近	(1) 前時に作成した「買い方ポイント」を確認する。	① 前時の学習を想起させ、課題設定へと導く。	
		○ 発問を行う。	○ 板書を行う。
2 学習課題の設定	(2) 学習課題を設定する。 「買い方ポイント」を買い物シミュレーションで試し買い方の新たなポイントを見つけよう。	② 学習課題を設定させ、本時の見通しを持たせる。	
		○ 発問を行う。	○ 板書を行う。
3 学習課題の追求 (買い物シミュレーション)	(3) 班毎に買い物シミュレーションをする。 ●1000円以内で弁当のおかずやなべ物の材料を4種類買う。	③ 買い物シミュレーションをすることで「買い方ポイント」を試すと共に、新たな観点(経済性・安全性・鮮度など)を見つけさせる。	
		○ 売り手として子どもに声をかける。	○ 売り手として子どもに声をかける。

(観点の交流)	ア ウインナー (食品添加物と価格)	④ 家庭生活での経験や商品の情報を活用して 選んでいるか。
	イ カニだんご (賞味期限と価格)	
(新たな買い方 ポイント)	ウ レタス (鮮度と価格)	④ 品物選びの観点を交流することで、情報を活用した買い物の仕方について考えさせる。
	エ にんじん (特別栽培と価格)	
(新たな買い方 ポイント)	(4) どの観点を品物を選んだか交流する。 ・カニだんごは賞味期限が今日までで安くなっていたので買いました。 ・でも、賞味期限が今日というのはいちばんおいしく食べられないのでやめた方がいいのでは？ など	④ 品物選びの観点を交流することで、情報を活用した買い物の仕方について考えさせる。
	(5) 新たな買い方ポイントをまとめる。 ・添加物が含まれている物はなるべく避けよう。 ・鮮度をよく見て購入しよう。 など	④ 品物選びの観点を交流することで、情報を活用した買い物の仕方について考えさせる。
4 まとめ	(6) 本時で学んだことをノートにまとめる。	⑤ 前時と本時の学習内容から、買い方ポイントを整理させる。
		⑤ 前時と本時の学習内容から、買い方ポイントを整理させる。
		⑥ ノート整理の時間を取り、本時の学習をまとめさせる。
		⑥ ノート整理の時間を取り、本時の学習をまとめさせる。

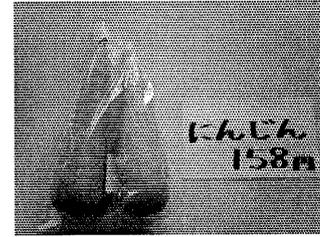
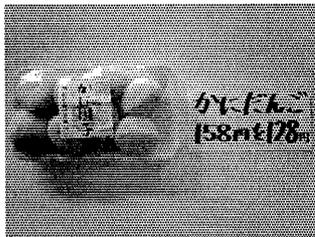
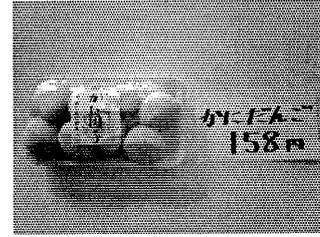
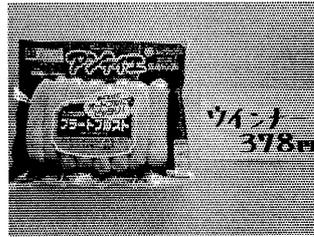
2. 授業の概要

次ページに示すのは、当日の買い物シミュレーションで用いた実物の写真である。子どもたちはこれらについて、日頃の生活経験をフルに生かしてさまざまな観点から「どちらを買おうか」と吟味し議論した。

- 値段は安いけど食品添加物がたくさん使われているからやめておこう。
- でも安いのは魅力だなあ。
- 特別栽培と書いているから農薬などが少なくてよいものだと思う。

- でも値段が高いよ。
- 賞味期限が今日までだけど、買おうか買うまいか。
- 今日食べるのならば構わないのでは？
- でもおいしさが逃げていないのかもしれないよ。それに今日全部食べられるかな？

など、いろいろな考え方が示され、一つのものを買うのにもさまざまな見方があることを学んでいた。そして、大切なのは「商品に関する情報を得て、それをもとによく考えることである」という考え方に到達した。



3. 成果と課題

- 「買い物」という身近な生活体験についての学習であったため、子どもたちは日頃の買い物失敗体験・成功体験を豊富に持っており、「失敗しない買い物」のためには何が大切なのかを学ぼうという意欲を強く示した。授業後の子どもたちのノートには「これからはいくつかの情報をしっかりと見て比べて考えよう」「今までは値段だけを見ていたけど、内容量とか原材料もよく見るようにしよう」など、学んだことを実生活に生かそうという意欲を持った子どもが多く見られた。
- 種々の実物(ウイナー・カニだんご・レタス・にんじんなど)を2種類ずつの中から、買い物シミュレーションでそのどちらを選ぶかを考える場面においては意思決定の必要性が生まれ、子どもどうしても考え方の相違が見られたため、どれを選ぶかで議論となった。子どもたちは相互に自分の生活体験をもとに意見を存分に交流しながら意思決定をした。こうした意思決定の体験は、実際の日常生活の買い物場面で生きて働く力となるものと考えられる。
- ほとんどの子どもは中学校の教師と一緒に授業することについて肯定的な受け止めをしていた。その受け止めの内容は「二人の教師がいることで学習がタイムリーに、かつ効率的に進む」「小学校の学習内容よりも発展的なものを教えてもらえる」「中学校の家庭科学習が少し分かる」が主なものであった。今後もT. Tの取り組みを積み重ね、子どもたちにとってより学ぶ価値のある形を求めていきたい。

英語科 実践事例

⑥実践事例

【事例1】

つきたい力 : ○英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度
○聞くことや話すことを中心とした実践的なコミュニケーション力

○学 年 : 広島大学附属三原中学校1年A組(41名)

○実施時期 : 平成16年9月17日(金曜日)

○単 元 名 : Speaking Plus 3 道案内 乗り物での行き方を尋ねる・教える

○授業の概要

目的地まで乗り物で行き方を尋ねたり、教えたりする言語活動を通して、道案内をする際の表現力と運用力の向上をねらいとする。

○教材観

本単元 Speaking Plus3 は、スピーキングを主とした会話形式の教材である。この学習を通して生徒に身につけさせたいのは、道案内をする際の表現方法である。ここでは、目的地までの乗り物を使った行き方を尋ねたり、教えたりする会話を取り扱うだけでなく、聞き返して確認したり、つなぎ言葉を使用するなど実際の言語の使用場面を意識した場面展開となっている。実践的な場面を想定した教材を扱うことで、生徒の興味や関心を高め、コミュニケーション能力を高めていくことができると考える。

○指導観

指導にあたっては、Reading に重点を置き、教科書の基本表現や発展的な表現の音読を通して、できるだけ多くの生徒が積極的に発表できるような場面展開にしたい。その際には、場面状況を理解した上でのジェスチャーを伴った発表となるような支援を促したい。また、基本表現を一部だけ変えてペア発表を通して、コミュニケーションへの意欲を高めるだけでなく、reading から speaking への移行をめざす。

○単元の目標(全3時間)

- ・ be 動詞と一般動詞を含む文章を理解できる。
- ・ 簡単な自己紹介のスピーチを聴いて、ポイントを理解できる。
- ・ 聞き取った情報をもとにして、簡単に人を紹介できる。
- ・ バスターミナルや駅で、目的地までの乗り物を使った行き方を尋ねたり、答えたりすることができる。
- ・ 聞き返して相手の答えを確認する表現を理解できる。
- ・ つなぎ言葉を用いることで、対話文を続けることができる。

○計画

- 第1次 まとめの練習1 (ALT との対話練習) 1時間
- 第2次 Listening Plus 2 1時間
- 第3次 Speaking Plus 3 1時間(本時3/3)

○本課の評価の観点・評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

- ①間違いを恐れずに、英語で自分の考えなどを伝えようとしている。

②知っている語句や表現を使って、英語で書いたり話したりしようとする。

イ 表現

①Which や Take を用いて、書いたり、話したりすることができる。

②適切な速さや声の大きさ、イントネーションで読んだり、話したりできる。

ウ 理解

①本文の内容を正しく読みとり、場面設定を理解することができる。

エ 言語や文化についての知識・理解

①場面や状況にふさわしい表現方法を理解することができる。

②目的地までの乗り物を使った道案内の表現を理解することができる。

○本時の目標

・バスターミナルや駅で、目的地までの乗り物での行き方を尋ねたり、教えたりする表現を理解する。

・聞き返して確認したり、つなぎ言葉を用いて会話を続ける工夫ができる。

・場面に即した音読をすることができる。

○本時の評価規準

・適切な速さや声の大きさ、イントネーションで読んだり、話したりできる。(イ②)

・Which や Take を用いた文章を書いたり、話したりすることができる。(イ①)

・目的地までの乗り物を使った道案内の表現が理解できる。(エ②)

【事例 2】

○学 年 広島大学附属三原中学校 2 年 43 名

○実施時期 平成 16 年 9 月 17 日 (金) 第 3 校時

○題材名 Speaking Plus 2 道案内?道順を尋ねる・教える?

○題材などについて

本題材は各課とは離れて独立しており、特定の場面と結びついた定型的な基本表現を主に学ぶ、スピーキングに重点を置いた Speaking Plus である。ここでは、街中で健が女性に郵便局までの徒歩での行き方を尋ねられる。1 年生で習った表現を確認し、更に街中での目的地までの徒歩での行き方を尋ねたり、教えたりする表現を学ぶ単元である。

言語材料として Could you tell me the way to ~ ? Turn (right or left) at the traffic light. You' ll see it on your (left or right) など目的地までの道案内を具体的に表現する方法を学習する。これらの表現に習熟することは実践的なコミュニケーションの基礎を養うことができる。

○目 標 : 街中での目的地までの徒歩での行き方を尋ねたり、教えたりする表現を理解し、相手の人に教えることを通してコミュニケーションをとることができるようになる。

○計 画 : 第 1 次 Speaking Plus 2 1 時間

第 2 次 コンピューターを利用した 1 時間

○授業の概要

本時は教科書を用いたモデル対話を学習した後、身近な地図を用いて実際に練習し、積

極的に会話ができるような発展学習を行った。教科書教材に興味を持ち、日常生活（道案内の場面）で用いられる表現を英語ではどう表現するのかを個人、グループで学習させた後、机を利用し教室を一つの街にみたと、道案内をさせることやインターネットの掲示板を利用し、他の生徒が行きたいところを知り、その情報を持っていけば道案内を英語で伝えるなど擬似的なコミュニケーション活動を仕組むことができた。

⑦成果と課題

(ア) 生徒の感想より

資料 1, 2 から ALT によるインタビューテストや音読指導に対して、生徒は前向きな意見を持っており、聞くことや話すことに対する意欲や関心が高まっていることが分かった。また、言語の使用状況を明確にし、発展的な自己表現学習の一環として実施したスキットづくりは回を追うごとにスムーズに運ぶようになった。今後も日々の授業の中で「自己を伝え」「他者の意見を大切にする」授業実践を行いながら、実践的なコミュニケーション能力を育む授業を展開し、生徒の英語力の向上をめざした指導を続けていきたい。

資料 1 生徒の感想より

●ALT とのインタビューテストを受けて有効だと思った理由は何ですか。

- ・ネイティブの発音を真似することで英語がうまくなる。
- ・新鮮味がある。
- ・将来外国の人と話す必要があるので聞く力をつけることができる。
- ・本場の英語と接することができる。
- ・会話を評価してもらえ。会話が上達する。
- ・英検の面接に役立つから。
- ・話すことに慣れるから。
- ・発音をなおしてくれるから。
- ・発音がよくわかるから。
- ・英会話に興味があるから。

資料 2 生徒の感想より

●スキットづくりについての感想を書いてください。

- ・話の内容を考えることが楽しい。
- ・会話が上達するから楽しい。
- ・発表することが好きである。
- ・緊張感が保てるから好きである。
- ・色々な話の展開を考えられるので好きである。

(イ) 調査研究から

英語学習に対する生徒の実態を調査し、生徒の実態を考慮した様々な学習内容、学習形態を考え、実施した。今後は、さらに新たな教材を開発し、評価方法を考えていく。